

乾田化へ 竹管敷設

畑作転換など多様な営農を展開するため水田の乾田化対策に取り組む川薩耕地事務所(さつま町)は、さつま町田原の水田で、暗きよ排水の導水管に竹を利用した工法の試験施工を行った。昔は竹を地中に埋め排水を良くする工事が広く行われていたという。同事務所は「一般的に使われている素焼き管に比べコストが安いうえ、伐採した竹の有効活用にもつながる」としており、実用化を急ぐ。

さつまで試験施工



竹管を使った暗きよ排水の試験施工

＝さつま町田原

パイプより土壌への環境負荷も小さいはず。事業単価が下がれば農家も乾田化に取り組みやすくなる。砂を充てんする工法と併用しながら進めていきたい」と話した。

川薩耕地事務所 「扱いやすく安価」

乾田化対策の暗きよ施工では、素焼き管のほか、「有孔管」と呼ばれる穴の開いたビニールパイプを使うのが一般的。素焼

き管は一拵当たり約八百円と単価が高めで、割れやすいなど扱いにくいのが欠点。ビニールパイプは単価は安い、土に含まれる鉄分が付着しやすく詰まりやすいデメリットがあるという。試験施工は、水はけを良くするため、あらかじめ

め表土下に三拵間隔で砂を埋め込んだ水田で五月三十日、行われた。田の脇に掘られた幅四十センチの暗きよに幅約四センチの竹を束ねてつくった竹の管(直径約十センチ)を敷設。しばしば砂層からしみ出た水が竹管を伝わって排水溝に流れ出た。「素焼き管に比べ敷設作業もスピーディーなもので、事業費は三分の程度に収まるのでは」と同事務所の岩元昭次長。久保章所長は「ビニール